

ふるさと見て歩き

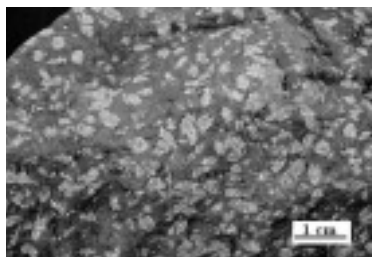
第76回

葦青石ホルンフェルス

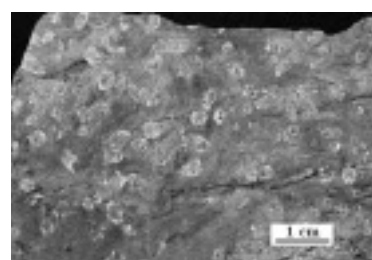
常陸大宮市を流れる那珂川、久慈川、玉川の河原を歩くと、様々な色や形をした礫（玉石）の中に、硯石のように黒色で表面にキラキラ光る美しい銀白色の点・丸・棒状などの模様を持つものを見かけることがあります。それらの礫はホルンフェルス（硬い角の意味）と呼ばれる

る岩石からできたものです。また、銀白色の模様は葦青石と呼ばれる鉱物が風化したものです。こうした葦青石を含むホルンフェルスを葦青石ホルンフェルスと呼びます。

ホルンフェルスは、泥の堆積によりできた泥岩が、地下深い場所でマグマと接し高熱で変成された岩石で

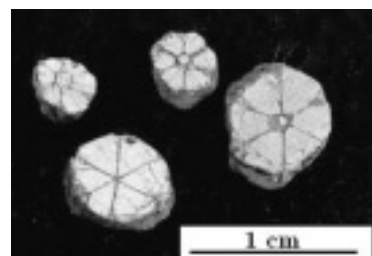


▲舟生産
「葦青石ホルンフェルス」1



▲舟生産
「葦青石ホルンフェルス」2

す。葦青石もその変成によってできた鉱物で、マグネシウム・アルミニウム・ケイ素・酸素が主成分です。肉眼で見られる葦青石の形は様々で、六角柱で断面が六片の花弁状の大きな結晶を作るものもあり、享保年間の一七六〇〜一七三六年頃に松岡玄達（如庵・怡顔斎）が『怡顔斎石品』で最初に記述した京都府亀岡市稗田野町柿花桜天満宮の通称「桜石」と、明治二三年（一八九〇年）に菊池安が報告した栃木県渡良瀬産の通称「渡良瀬（川）桜石」がその代表格といえます。そして、京都の「桜石」産地近隣の寺院では、風化により母岩のホルンフェルスから抜け出た桜石の薄片を紙に包み、藤原道真にちなんで災難や雷除けのお守りとして昭和の初期頃まで参拝者に授けていたようです。また、詳細は不明ですが柿花桜天満宮北西の宮川町宮川から産出する葦青石ホルンフェルスは、砥石としても六五〇年以上の歴史を持ち『宮川砥』の名称で古くか



▲桜石
（亀岡市稗田野大谷鉦山産）

ら採掘・活用されてきました。そしてこの地は現在でも青砥（色が青く、きめの細かい粘板岩で作った砥石）の全国の標式地となっているそうです。

常陸大宮市域で葦青石ホルンフェルス礫を河原で見ることができると先に紹介しましたが、石器としても市内から出土しています。そこで、常陸大宮市の葦青石ホルンフェルス礫の起源（故郷）を知るために範囲を広げて検証すると、栃木県大田原市では「松葉石」、那珂川町では「千鳥石」、茨城県稲敷市浮島では「小紋石」と、地域によって異なる呼名とそれにまつわる伝説も存在していました。それらの伝説の概要は次のとおりです。

千鳥石伝説…小砂の高倉山にある寺を山火事から守った無数の小鳥たちが体を冷やすために、小口川に舞い降りた時の足跡が河原の小石に残った。

小紋石伝説…浮島城主浮島弾正が佐竹軍に攻め滅ぼされた折、弾正の

娘小百合姫は小舟で霞ヶ浦に逃れた後に湖に身を投じた。その時に姫が着けていた小紋の小袖が化石化して「小紋石」となった。浮島地域では小袖ヶ浜で拾った「小紋石」は安産の「お守り」として珍重された。

「松葉石」は伝説こそありませんが松葉川とその支流の前松葉川の名前の由来となった可能性が考えられます。

常陸大宮の河原の葦青石ホルンフェルス礫の起源（故郷）を考察すると、すべてが八溝山地の中生代の地層にあると判断されます。そして、那珂川の河原の礫は大田原市や那珂川町付近の地層からのもので、玉川の礫は昔の那珂川や久慈川が八溝山地から運び堆積させた礫層を、玉川が再び洗い出し運んだものと考えられます。上村地区の丘陵の礫層にも、その証となる葦青石ホルンフェルスの礫が含まれていました。久慈川の河原の礫には栃木県の須賀川地域の地層を起源とするものと、大子町から常陸大宮に至る間の地層を起源と予想されるものがありました。そして、現在開催されている企画展の準備調査で、舟生地域から予想どおり美しい葦青石ホルンフェルスの地層（露頭）を、県内の久慈川水系で初めて発見しました。

※勅自然史科学研究所主席研究員 菊池芳文氏よりご寄稿いただきました。

歴史民俗資料館大宮館

52-1450